

# 訳注『風月小誌』第三号（下）

要 木 純

1 初春見鶴

朱桜岡守手

天路にむれて たづ遊ふ見ゆ

【大意】（春の初めに鶴を見て）よく見えないが、霞がかかつた、お日様の御殿が出現したのだろうか、天上への道に群れ飛んで、鶴が遊んでいるのが見える

【注釈】○初春見鶴

香川景樹『桂園一枝』「初春見鶴」題では二首を収め、一首は「朝ごほりとけたる沢に啼くたづ

のこゑ大空に霞む春かな」。○朱桜岡守手 中村守手。既出。○霞たづ 地上のみならず、天空に對してもいう。春や

春日（かすが）にかかる枕詞でもあるが、こころも実景的であるとともに枕詞的。万葉集・小野田守「霞たづ長き春日を

かざせれどいや懷しき梅の花かも」。○日の若宮や 日の少宮。日本神話で、天上にあつたという大宮。日本書紀・神

代上「仍りて日之少宮に留宅（ととまりす）みます。（注）少宮、此れをば倭柯美野（ワカミヤ）と云ふ」。○いてづら

む 歌では、月に対してしばしば用いるのを日に用いたのが、新奇。永縁「有明の月とともにや出でづらむ山ほどとぎ

す今ぞ鳴くなる」。らむは、現在推量だが、ある現象の結果や原因に対するいぶかりをしめす。○天路 天上にあると

いう道。また、天へ昇つて行く道。日の若宮に對して用いる。地上から天に向かつて飛びたつていると考えたい。万葉

集「夕星も通ふ天路をいつまでか仰ぎて待たむ月人をとこ」。○たづ遊ふ 宮内卿「さしのぼる日影たけゆく朝風の雲

なき空にたづ遊ぶなり」。鶴（たづ）と（飛び）立つを掛けるか。○みゆ 単にみえるというだけではなく、作者が作

2 愛梅

嶋重養

出雲杵築人

小野のふる里

を(お)の

またさかぬ

花の都の

道かへて

うめ見

みゆか

を(お)

【大意】

（梅が好き）花の都の京都にはまだ桜が咲かないで、道をかえて梅を見に行こう、あの小野のむらへ。

【注釈】

○愛梅 新名題に毎歲愛梅の題あり。○嶋重養 島重養。一八二二一八八三。江戸後期から明治時代の神職、

歌人。やはり神職、歌人の、島重老の長男。出雲大社の上官職をつぐ。○杵築 出雲大社の古名。また、その周辺の土地。現出雲市に属す。○またさかぬ 信実「まだ咲かぬ軒端の梅に鶯の木伝い散らす春の淡雪」。○花の都の 都の美称。はなやかで美しい都。また、桜が咲き競う都。古典ではおもに今の京都。重之「春ことに忘られにけるうもれぎは

花のみやこをおもひこそやれ」。○道かへて 西行「吉野山去年の枝折の道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん」。○うめ見に行む 古今集「駒並めていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ」。○小野のふる里 京都市左京区高野から八瀬・大原にかけた一帯の古称。惟喬親王が幽居した所（伊勢物語）。京都は梅が散り、桜が未だしの中途半端な時節なので、まだ寒くて梅が咲いている京都の北部へ向かつたということであろう。良経「浅茅原秋風たちぬこれぞこのながめなれにしをのふるさと」。ふるさとは、荒れ果てた古跡の意ではなく、かつて通つたり住んだりした、昔なじみの場所の意。貫之「人はいさ心もしらすふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」。

3 万物感陽和

中村守丘

ひまとめて 嘸咽うをも 春やしるらむ

【大意】（物皆春に感應する）丹生川の融けた氷の割れ目を求めて、口をバクパクと動かす魚も春の到来を感じているのであろうか。

【注釈】○万物感陽和 この句、明初の周是修・述懷五十三首其十八にあり。加藤千蔭に同結題あり。陽和は、春の穏やかな温かさ。史記・秦始皇本紀「維れ二十九年、時は中春に在り、陽和方に起く」。○中村守丘 既出。守手の子。○丹生川や この名の川は、各地にあるが、おそらく和歌山県橋本市等を流れる川（紀の川水系）。高野山参詣道に沿

う。○とくる氷の 源正純「谷風にとくる氷のひまご」とに打ち出づる浪や春の初花。○ひまとめて ひま（隙）は、時間に限らず、一般に物のすきまをいう。前注所引の正純の歌にも氷のひまとあつた。とむは求める意。ひまとめては、鎌倉期にはやつた表現か。宮内卿「ひまとめて山田の小芹摘む人の袖さへこほる雪の下水」。○喰悶（アギトフ） あぎと（頬）から派生した語。魚が水面で、えらをぱくぱくと動かして呼吸する。熱田日本書紀仲哀二年六月「其處の魚六月に至て常に傾浮（アギトフ）こと、醉ゑるが如し」。左思・呉都賦「喰悶して沈浮す」。○春やしるらむ「春を知る」の「を」を省略して、疑問の「や」を加えた。基家「夕霞色濃き時はおしなべて野なる草木も春や知るらむ」。

4 春 晓 月  
宵 の間に 霞みしよりも あはれなり  
河野 小弁子 出雲 松江人  
花にかたふく 有明の月

【大意】夜の間に霞んだ月は、おぼろ月といつて古来風情あるものとされるが、それよりもずつとしみじみとした趣が深いことだ。桜の花に向かって傾きかけている明け方の月は。一見華やかに過ぎるようと思われるだろうが。【注釈】○春曉月 為家に「春曉月を」の題あり。○河野小弁子 不明。女性か。平安後期の女流歌人に小弁（こべん）がいることから、読みを推定した。○宵の間に 赤人「宵の間におぼつかなきを杜鵑鳴くなるほどの音のはるけさ」。古今集「宵の間に出て入りぬる三日月のわれて物思ふころにもあるかな」。○霞みしよりもあはれなり 重之「音もせで思ひにもゆる虫こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ」。○花にかたふく有明の月 後鳥羽院 「あはれしる人はとひこで山里の花にかたぶくあたらよのつき」。独り寝で夜を明かす寂しさを暗示するか。

5 山吹  
やまぶきの 花の園敏郎 田中氏  
やまぶきの 花の盛と なりにけり いさ見に行む 井手の玉川

【大意】山吹が盛んにさく時節となつたことだ。さあ井手の玉川に見に行こう。

【注釈】○山吹 バラ科の落葉低木。春に黄金色の五弁花を咲かせる。万葉集「山振（やまぶき）のほへる妹がはね

ず色の赤裳の姿夢に見えつつ」。恋と取り合わせる歌が多い。○莠の園敏郎田中氏 不詳。飯山綱之助編『同風歌集二編卷中』（明治十一年から十二年）二十五葉に島根の歌人として田中敏郎とその作品を載せる。莠は、古来悪草とされ（論語）、猫じゃらしやイヌビエ等の稻と紛らわしい雑草。謙称。○やまふきの花の盛となりにけり 俊恵「み吉野の花の盛りと知りながらなほ白雲とあやまたれつ」。六条斎院歌合「行きすぐる人もあらじな山吹の花の盛りとにはふ宿には」。○いさ見に行む 古今集「こまなめていざ見にゆかむるさとは雪とのみこそ花はちるらめ」。○井手の玉川京都府綾喜郡井手町を流れる川。奈良時代には橘諸兄の別邸があり、当時、井手左大臣と呼ばれていた。諸兄は玉川の堤にヤマブキを植え、名所として知られるようになつた。俊成「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露添う井出の玉川」。

6 羣中暮春 真弓の舍真嬌妬足立氏 出雲松江人

この  
此ゆふへ 春に別れて 旅ころも 更にも袖を ぬらしつるかな

【大意】（旅中、春が終わる）久しく故郷を離れ、まさにこの夕べに、春ともお別れする。涙で、私の旅装の袖は、今までにして、濡れてしまつたことだ。

【注釈】○羣中暮春 羣中は羣中。旅の最中であること。木下幸文に同題あり。○真弓の舍真嬌妬足立氏 不詳。真嬌妬の読みも不詳。女性か。○此ゆふへ 人曆「この夕降りくる雨は彦星の早漕ぐ舟の櫂の散りかも」。立夏前日の夕べだからこそその感慨。○春に別れて 重之「初声は聞かまほしきを杜鵑春に別れむことぞかなしき」。○旅ころも「たびのころも」に代わって、平安後期から多用されるようになつた表現。旅自体、旅中の悲哀をも指す。防人歌「旅衣八重着重ねて寐のれどもなほ肌寒し妹にしあらねば」。詞花集「別れ路の草葉を分けむ旅衣たつよりかねてぬるる袖かな」。○更にも 拾遺集「忘れにし人のさらにも恋しきかむげにこしとは思ふものから」。いまさらながらの気持ちもあるか。○袖をぬらしつるかな 和泉式部「浮世には嵐の風にさそはれて来し山河に袖を濡らしつ」。

7首夏蝶  
おなし色に 咲うの花の しつ枝より

村松きゑ子 全所人  
出て胡蝶は 頭れにけり

【大意】蝶が、同じ白色にさく卯の花の、下の方の枝から出てきて、はつきりとみえるようになった。まるで、私においておいでをするかのよう舞つてゐる。

【注釈】○首夏蝶 首は初に同じ。蝶は普通は春。卯の花は夏。○村松きゑ子 村松喜恵女。国老村松内膳の妻。藤田輔長門。元治元年千首にその作を載せる。『愛國婦人会島根県支部概要』（昭和十七年）五十六頁議員名簿にその名あり。○おなし色に 貫之「同じ色に散りし紛へば桜花ふりにし雪の形見とぞみる」。○しつ枝より 為家「風渡る水際の松のしづえより吹く方知れと靡く藤波」。○出て胡蝶は 貫之「ここふにもにたる物かな花すすきこひしき人に見すべかりけり」。漢語であるが、和歌にも用いられる。「ここふ（来いといふ）」を兼ねるか。○頭れにけり 隠れていたものが表に出る。古今集「池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれにけり」。

8里卯花 須我の舎道雄 出雲大原郡人

ひさかたの 桂のさとの 卯花は 月の影かと あやまたれけり

【大意】桂の地の卯の花は月光と見まがうばかりに白く輝いてゐる。

【注釈】○里卯花 頓阿に同題あり。草庵集・御子左大納言家「里卯花」さらでだに月かとまがふ卯花を露もてみがく玉川のさと」。○須我の舎道雄 不詳。○大原郡 古代よりある郡名。明治十二年、郡区町村編制法の島根県での施行により行政区画としての大原郡が発足。現雲南省の一部に当る。○ひさかたの 語源不詳の枕詞（日射す方、瓠形説あり）、天候、天体（日月など）に関する事に掛かる。月の中に桂の木があるという伝説から、「桂」および、それと同音の地名「桂」にかかる。定家「ひさかたの桂にかくるあふひ草空の光にいくよなるらん」。○桂のさとの 桂は、日本ではカツラ科の落葉高木。中国ではモクセイをいう。地名としての桂の里は、京都市西京区。桂川の西。月には桂の樹が生えているとの大陸渡来の伝承から、桂は月の縁語となる。左兵衛佐師時家歌合「久方の月の影とも見ゆるかな桂

の里に咲ける卯の花」や為家「久方の桂の川の卯の花は月からぬか夕暮れの空」の翻案。○卯花は月の影かとあやまたれけり 古今集「宿近く梅の花うゑしあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり」。貫之「かみまつる宿の卯の花白妙のみでくらかとぞあやまたれける」。

9 鶴河  
むすほる、  
瀬々の鶴縄を  
とくも流る、  
益荒男か  
瀬々の鶴縄を  
益荒男か  
とくも流る、  
簾火の影

【大意】（鶴飼をしている河）結ばれてもつれた、瀬の一つ一つに仕掛けた鶴飼い用の縄を、立派な男たちがと（解）いている、すると、その「と（疾）く」ではないが、高速度で、舟と共に水面を流れていく、かがり火の光が。

【注釈】○鶴河 鶴飼をする川のこと。各地に鶴河の地名があるが、特定の川を指すのではあるまい。鶴飼 자체を意味することもある。家持「婦負河の速き瀬」とに簾さし八十伴の男は鶴川立ちけり。金葉和歌集「实行卿家歌合に鶴河の心をよめる 中納言雅定」。○和田歳貢 国会図書館に『壇樂舍歌集（足穂舍歌集）』（明治四十三）高田宜和等著、和田歳貢校あり。○駿河沼津 現静岡県沼津市。○むすほる、結ばれて解けにくくなる。もつれる。公經「玉の緒はむすぼれてのみやみなましかくしも君が思ひとかずや」。恋の執着を暗示するか。○瀬々の鶴縄を 瀬々は多くの浅瀬。定頼「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木」。鶴縄は鶴飼をする人が、鶴をあやつるため、鶴の頸につける縄。光俊「この川に小夜更ぬらしかつら人うなは手にまき船くだす也」。恋の比喩か。○益荒男か 正徹が鶴河の題で、「ますら男が夜な夜な出づるうかひ火に夕やみしらぬ宇治の川波」、「ますらをが鶴舟の簾さしとくも綱手くるしき後の世のやみ」。ますらをは優れた立派な男子の意であったが、後に肉体労働にたずさわる、狩人、漁師をも指すようになつた。○とくも流る、結ぶと解くは縁語。解くと疾くで掛詞。恋を断ち切ろうとして、できないさまか。○簾火の影 かがり火（かがり）は、鉄製のかごの中に松材を盛つて燃やす火。夜中の警護、照明、または漁獵の際などに用いる。影は光。万葉集「島つ鳥鶴飼伴なへ可我理（かがり）さしなづさひ行けば」。金葉集「大堰川幾瀬鶴舟の過ぎぬらむほのかになりぬ簾火の影」。かがり火は船上で焚いているのであろう。新後拾遺集「鶴飼舟下す早瀬の

川波に流れて消えぬ篝火の影」。恋の炎がもえつづけることを暗示するか。

10名所蓮　岡崎小幸子　出雲松江人  
勝間田の　いけ水すみて　しら露の　かけも涼き　花はちすかな

【大意】（蓮で有名な池を詠む）勝間田の池の水が澄んで、蓮の花にかかつた白露が水面に映る影も涼しげである。

【注釈】○名所蓮 同題未詳。○岡崎小幸子 橋道守編『新年勅題詠進歌集』第六輯（明治二十五年 椎本吟社）に、出雲国松江市堅町捨太郎母岡崎小幸子として、和歌二首を載せる。その他、大正六年まで、諸和歌集に選ばれている。息子捨太郎は島根県で、後に小学校教員や通信局員を勤めた。実業家、政治家岡崎運兵衛だという説もあり。○勝間田のいけ水すみて 万葉集・献新田部親王歌「勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君が鬚なき」とし。この歌にあるよう、この池に蓮はなかつたはず。勝間田の池は、奈良市五條町の唐招提寺の近くにあつたという池。あるいは、目前の蓮の光景をもとにして、太古を空想して作った歌か。○しら露のかけも涼き 定家「いかにして向ひの丘に刈る草の束の間にだに露の影みむ」。ここは露自体の光る（影に光の意あり）さまか、あるいは水面、葉面に映つた透明性のある露の影のさまをいうか。○花はちすかな 蓮字は葉を指し、はすの本来形である「はちす」は、花が枯れて実を生じた蜂の巣状のものをいうので、特に花の字を付けたか。信実「露宿す契りもあるを花はちすなほたまこづやうきはなるらむ」。

11泉　杉村孝誼　駿河沼津人  
おと立て　岩間もりくる　眞清水は　結はぬ先に　袖そそすしき

【大意】（湧き出る泉）大きな音をたてて岩の間から盛んに湧き出てもれてくる清らかな水。両手で汲もうとするまえに、袖の中に涼風が入つて来る。

【注釈】○泉 湧出泉に限らず、瀧状のものもいう。○杉村孝誼 南野政文編『聖代千人一首』（明治四十年）三十八

頁に伊豆の人として、名と作品を載せる。現沼津市南部は古代の伊豆の国に属していた。他集にも収録。○おと立て為家「おとたてて今はた吹きぬ我が宿の荻の上葉の秋の初風」。○岩間もりくる 頓阿「冬寒み凍るぞはやきたえだえに岩間もりこし山川の水」。○真清水は 隆源「真清水の見れば涼しく覚えつつ結はで只に過ぐしつるかな」。○結はぬ先に結ぶは、水を両手でくう意。俊成「松蔭の水の白糸秋来れば結ばぬ先に風ぞ涼しき」。○袖そすすしき 玉葉集「風渡る川瀬の波の夏祓夕暮れかけて袖ぞ涼しき」。

12 河夏祓 かわのなつはらえ  
森武平 もりたけひら  
出雲松江人 いずもまつえのひと

かは風に こころ涼く 御祓して 世のうきことも 水無月の空  
【大意】（川で夏のみそぎをして）川を吹く風に、こころも涼しくなるみそぎ、見上げれば、世の中のつらいことも皆尽きてしまうという水無月の夏の空。

【注釈】○河夏祓 頓阿に同題あり。六月三十日の夏越祓のこと。川辺で邪氣を払うみそぎ等をする行事。○森武平 大塚真彦等編「新年勅題歌集」（金花堂 明治十六年）の五十七葉表に名と作品あり。ただし、田中（松江市乃木の地名？）の人とする。○かは風に 新古今集「みそぎする檜の小川の川風に祈りぞわたる下にたえじと」。○こころ涼く 気持がすがすがしい。気分爽快。八条院高倉「ふく風や七重宝樹にかよふらんこころすずしきこの夕かな」。○御祓して みそぎは身注ぎ、水浴びして体を清める行為。○世のうきことも 古今集「いかならむ嚴のなかに住まばかは世の憂きことの聞え来ざらむ」。具平親王「みるほどはよのうきこともわすれけりまだもはなをぞううべかりける」。「夜の」を掛けて恋のつらさをいうか。○水無月の空「皆尽き」を掛ける。道綱母「鶯も期もなきものや思ふらむみなつきはてぬ音をぞ鳴くなる」。隆信「みそぎするいぐしのしでに風過ぎて涼くなりぬ水無月の空」。

13 立秋  
ひさかた  
久方の  
くも  
雲のゆきかひ  
あら立て  
空にしらるゝ  
秋のはつかせ  
る  
【大意】（立秋の日に）雲がいつたりきたりして、大荒れになつてゐる天上に、なんとなく、秋の初めての風が吹いてきて、いることが想像される。地上はさほどではないが。

【注釈】○蘭園富義神谷氏 村上忠順編『元治元年千首』（明治七年）に神谷富義名で掲載。作中「出雲河」の語あり。  
○久方の 挂詞。天空や天空に関わるものに掛かる。敏行「久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」。  
○雲のゆきかひ 按察「夏の日も涼しかりけり風はやみ雲の行きかふ夕立の空」。○あら立て 荒々しく振る舞う。暴れ出す。源氏・帚木「鬼神もあらだつまじきはひなれば」。○空にしらるゝ 空は、天空と、ぼんやり（心も空に）としたうつろな気持とを掛けている。師頬「昨日にはかはるとなしに吹く風の音にぞ秋は空に知らるる」。○秋のはつかせ 古今集「我が背子が衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつかせ」。

14 早秋虫  
さちむ  
なき初る  
むしの音きけり  
浅茅原  
あらやしはら  
露より外の  
あきもき  
人  
勝部瓶比古  
かつべかのひ  
出雲大原郡人  
いずもおはらんのひと

【大意】（早秋虫の声を聞く）この秋はじめて鳴く虫の音をきいた。茅の広がる野原、露が秋の訪れにふさわしいとされるが、それ以外にも秋は来ているのだ。

【注釈】○早秋虫 木下幸文に同題あり。○勝部瓶比古 『雲藩職制』（一九二一九）の寺子屋の頃、大原郡上久野村の神官であつた彼が、天保年間、常盤堂という寺子屋で教鞭をとつたことが記されている。後出綾太理の父。○なき初る 西行「三笠山月さしのぼる影さて鹿鳴きそむる春日野の原」。○むしの音きけり 古今集「わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまつぞかなしき」。○浅茅原 本来は丈の低いチガヤの生えた野原のことであるが、一般に雑草の茂つた荒野をいう。万葉集「山高み夕日隠りぬ浅茅原後見るために標結はましを」。恵慶「浅茅原たまくくずのうらかぜのうらがなしかる秋は来にけり」。○露より外の 弁内侍「旅人の袖を思へば野も山も露より外の道やなから

ん」。親盛「浅茅原葉末に結ぶ露ごとに光を分けて宿る月影」など、秋の浅茅原には露がつきもの。○秋も来にけり。為家「久方の雲居はるかに待ちわびし天津星あひの秋も来にけり」。

15 腹たかはら 高畠智義たかはたともよ 出雲松江人いずもまつえのひと

はつかにも 桧の音きこゆ 空の海の 雲の波わけ 腹渡るらし

【大意】（雁）かすかに舟をこぐかじの音のようなものが聞こえる。舟じやない、空の海、雲の波を分けて、雁が飛んでいくときの鳴き声に違いない。

【注釈】○高畠智義 不明。松江藩に高畠知徳という諸集に掲載される人あり。藩士の家柄の高畠氏か。○はつかにはつかなりは、かすかだの意。別語のわづかなり（分量が少ない）と早くから混同。忠岑「春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも」。伊勢「はつかにも君をみしまの芥川あくとや人のおとづれもせぬ」。○楫の音きこゆ 伝統的には「かぢのおと」。あるいは「かぢのね」と読んだか。万葉集「われのみや夜船は漕ぐと思へば沖への方に可治（かぢ）の音すなり」。同「我が背子にうら恋ひをれば天の川夜船漕ぎとよむ楫の音きこゆ」。○空の海の人磨「空の海に雲の浪たち月の舟里の林にこぎかくる見ゆ」。○雲の波わけ 正徹「朝あけの雲の浪分け嶺こえて花の初しほさす日影かな」。○腹渡るらし 人磨「巨椋の入江響むなり射目人の伏見が田居に雁渡るらし」。

16 月つき 小谷古蔭おたにふるかげ

あかす見し 雲井の月の をち水は 頭の霜かしらしも なりにけるかな

【大意】（月）若返りの水を求めて、雲の間の月をあきないでずつと見続けていたのに、どうやら、髪の毛を霜のようにするだけでもなしく時を過ごしてしまったようだ。

【注釈】○小谷古蔭 既出。○あかす見し 教長「飽かず見し同じ都の月なれば旅の空にも変はらざりけり」。○雲井の月の 雲井は雲居。くものある天上。後拾遺集「今はただ雲居の月をながめつづめぐりあふべきほども知られず」。

○をち水は 復水。変若水。「おち」は若返る意。飲むと若返るという水。上代、月にあると信じられていた水で、欠けた月がまた満ちることを生き返ると考えたところから生じた伝説。万葉集「わがたもとまかむと思はむますらをは変水（をちみづ）求め白髮生ひにたり」。○頭の霜と 季通「女郎花いとどや我を厭ふらむ頭の霜の秋の深さに」。○なりにけるかな 是則「佐保山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな」。

17 秋月勝春花  
(秋月は春花に勝る)

旭照<sup>きよくしょう</sup> 舎敬明<sup>やうけいめい</sup> 平井氏<sup>ひらいし</sup> 出雲松江人<sup>いずもまつゑのひと</sup>

山深く わけ入て見し 花よりも 月のあはれは

奥なかりけり

【大意】（秋の月は春の花より優れていることについて）深い山の中に分け入って見つけた花、それは西行がさがしもとめた美の極致の花かも知れないが、その花よりも、平地で普通に見える秋の月のしみじみとした情感は、ずっと限りないものである。

【注釈】○秋月勝春花 為義に同題あり。額田王の春秋競憐歌のよう、春と秋の優劣を詠む歌は上古よりある。拾遺集「春はただ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまさる」や源氏物語・少女の春秋優劣の争いが有名。○旭照舎敬明平井氏 不詳。○山深くわけ入て見し 風雅集「山深くなほわけ入りてたづぬれば風に知られぬ花もありけり」。○花よりも 俊惠「花よりも月をぞ今宵惜しむべき入りなばいかが散るをだにみむ」。○奥なかりけり 奥無しは、奥深く際限がない。無限である。西行「ときはなる花もあると吉野山おくなく入りてなほたづね見む」。

18 撫衣<sup>とくい</sup>

梅園正富<sup>つゆのまさとみ</sup> 同所<sup>どうしょ</sup>人<sup>ひと</sup>

秋の夜も ふけにけらしな 賤<sup>しつす</sup>の女<sup>め</sup>か 打<sup>うつ</sup>や砧<sup>きぬた</sup>の 音<sup>おと</sup>たゆむなり

【大意】（砧で衣を打つ音）秋の夜もずいぶん更けたようだ。眠いのか、下女が打つきぬたの音も、ものうげにゆつくりになつてゐる。

【注釈】○撫衣 李白・子夜吳歌四首其の三「長安一片の月、万戸衣を撫つ声」。資綱の歌に「永承四年内裏歌合に撫衣

をよみはべりける」の詞書あり。○梅園正富 柏植氏 不詳。○秋の夜も 砧を打つのに「飽き」るを掛けるか。○ふけにけらしな 玉葉集「秋風はふけにけらしな里遠き砧の音のすみまさりゆく」。○賤の女か 身分の低い女 好忠「しづのめがあさけの衣めを荒みはげしき冬は風もさはらず」。○打や砧の 宗寂「聞けばなほ打つや砧の乙女子が袖寒からじ小夜のふけゆく」。○音たゆむなり 小大進「唐衣汙ゆる霜夜に打ちわびてまどろむ程や音たゆむらむ」。たゆむは、油断する、気が緩む。

19 山初冬 樹樂庵長閑 市川氏 同所人  
今朝よりの 冬とも更に 思はれす 雪を常なる  
富士の高根は

【大意】（山間部の初冬）今朝から、立冬で冬になるとは全然思いつきもしない。雪が一年中積つてある富士の高嶺を日頃見ていると。

【注釈】○山初冬 新名題に同題あり。○樹樂庵長閑市川氏 不詳。○今朝よりの 立冬の日をいうであろう。信美「今朝よりの時雨は雪になりにけりさてだに松の色変はれとて」。有光「今朝よりの冬とは何をわきていはむ昨日も同じ空ぞしぐれし」。○冬とも更に思はれす 宗良親王「神無月時雨るる雲の晴れ曇り今日は冬とも定め兼ねつ」。○雪を常なる つねなりは永久不变の状態。古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」。○富士の高根は赤人「時じくぞ雪は降りける語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は」。

20 朝霜 熊谷実平 全所人  
ちりつみし 松の古葉に 霜見えて 朝風さむし をかのへの里

【大意】（朝の霜）地面に降り積もっている松の古葉に、白い霜がかかっているのが見える。朝の風が冷たい、丘のあたりの里。

【注釈】○朝霜 万代集に朝霜を詠めるの詞書あり。○熊谷実平 不明。○ちりつみし 散り積みし。散り積ること。

親隆「鏡山ひかりは花の見せければちりつみてこそさびしかりけれ」。○松の古葉に 正徹・庭前松「陰ふかき松のふる葉に千世の数つもれる庭のちりなはらひそ」。○霜見えて 松の葉に霜を取り合わせるのは珍しいか。○朝風さむし長屋王「宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに」。続拾遺集「霜深き庭の浅茅の萎れ葉にあさかぜ寒しをかのべのさと」。○をかのへの里 岡のあたりの村里。おかげ。慈円「岡の辺の里のあるじを尋ぬれば人はこたへず山おろしの風」。岡のそばは、松も茂り、平地より寒いのであるう。

21月前水鳥 けつぜんのすいちょう 勝部綾太理 かつべあやたり 出雲大原郡人 いずもおおはらぐんのひと  
三島江や みしまえ 蘆間に眠る あしまねむ をし鳥の おどり 床もあらはに とこ 月さえにけり つき

【大意】（月が照っている。手前には水鳥がいる）三島江の芦の間でねむるつがいのおしどりの、巣の中がはつきりとみえるほどに、月がさえわたっている。

【注釈】○月前水鳥 千載に「月前水鳥といへる心をよめる 前左衛門督公光」とあり。○勝部綾太理 前出勝部瓶比古の息子。文部省『学校幼稚園書籍館博物館一覧表』（明治十四年）に大原郡上久野小学の校長として、名を載せる。桃節山『郷校取調巡郷日記十五・第十九中学区巡回日記』（巖南堂書店 一九八九）八五頁に「綾太理は即瓶比古の伴にて」。○三島江や 淀川下流の古称。神聖（み）な中洲（しま）があつたか。歌枕。恋を暗示する歌が多い。人麿「三島江のたまえのこもをしめしよりおのがとぞ思ふ未だ刈らねど」。「三島江の入江のまこも雨ふればいとどしをれてかる人もなし」。万代集「三島江や芦の枯葉の下ごとにはがひの霜を払ふをし鳥」。○蘆間に眠る 顕輔「難波江の蘆間に宿る月見ればわが身一つも静まざりけり」。○をし鳥の 鴉鷺。雌雄が常に一緒にいることから仲むつまじい男女または、夫婦にたとえる。逢瀬の後を暗示するか。○床もあらはに 生蓮「鶴臥す床も露はになりにけり霜枯れ渡る茅原蓬生」。定房「秋の夜の長き思ひに鳴く虫の床も露はにすめる月影」。○月さえにけり 肥後「玉鉢の朝行く道の小笠原わくるもすそに霜さえにけり」。

22 里雪

嶋多豆夫

出雲杵築人

豊年の

しるしをつみて

宝田の

千代田の里に

雪ふりにけり

大意

(里に降る雪) 今年は豊年になるという象徴が積み重なっている。宝田の千代田の里に雪がふったのだ。

【注釈】

○里雪 為尹に同題あり。○嶋多豆夫 島多豆夫。歌人、出雲大社權宮司。前出重養の養子。一八三二一

一九一二。○豊年 五穀のゆたかにみのる年。知家「あらたまるけふとよとしのはじめとて民のかまどもけぶり立ちそふ」。○しるしをつみて 俊成「世を祈る神のしるしはとよとしの深くつもれるみ雪にぞ知る」。雪は豊年の前兆。○宝田の千代田の里に 東京の地名。太田道灌が江戸城築城の際、この地には千代田、宝田、祝田の三村があつたとう。ただ、この歌になぜこれらの地名が現れるのか不明で、単に宝のような田、永久に続く田と、自らの里をほめたたえたのだろうか。○雪ふりにけり 人麿「夜を寒み朝戸を開けて出でぬれば庭もはだらに雪ふりにけり」。

23 見恋

高木丘山

駿河静岡人

仄かにも

月の光を

見てしより

思ひの雲の

はるゝ夜そなき

【大意】

(一目ぼれ) ほのかに月の光のごときあなたのお顔を垣間見てから、思いは募り、心に雲がかかって、晴れる夜

は全然ない。

【注釈】○見恋 未見恋に対している。一目見たのちの恋に悶える気持ち。玉葉に同題あり。次首、次々首と同座で、恋の経過が詠まれたか。○高木丘山 『官省府県官員録 静岡裁判所職員録』(明治十三年) 等外四等出仕沼(津)区担当の欄に静岡県士族として記載。元勘定奉行所に出仕し、江戸時代の記録を残す。第一号に漢詩が載せられている。吉岡清秋がこの時期に沼津で裁判官をしているので、彼を通じて投稿したか。次首の村上博も同様。○仄かにも貫之「山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそひしかりけれ」。人麿「夕月夜暁闇のほのかにも見し人ゆゑに恋ひわたらかも」。○月の光を 仲文「有明の月の光をまつほどに我がよのいたくふけにけるかな」。○見てしより 小町「うたたねに恋しきひとを見てしより夢てふ物は思ひそめてき」。○思ひの雲の 思「ひ」に、燃え上がる恋情の「火」、「ひ」

かりを、掛けるか。肖柏「峰高み思ひの雲もかかるめり積る恨みの塵ひじの山」。○はるゝ夜そなき 後撰集「あまくものはるよもなくふる物は袖のみぬるる涙なりけり」。内經「照りもせぬならひをはるの光にて月に霞のはるるよぞなき」。

24 祈恋いのるこい  
みしめ縄なはわ  
懸かけて祈いのりし かひもなし むすひの神やかみ  
名なのみ成なるらむ

【大意】（恋の成就を祈つたのに）みかじめの縄をまわりに「かけて」、あなたとのことを心に「かけて」祈つた甲斐もなかつた。縁結びの神というが、名前だけで役にも立たない。

【注釈】○祈恋 成就を願う（がうまくいかない）恋を詠む。新古今に「家に百首歌合し侍りけるに、祈恋といへる心を 摂政太政大臣」の詞書あり。○村上博『静岡裁判所職員録』明治十四年八月の判事補谷村区裁判所の項に、宮城县平民とあり。明治の漢詩集、和歌集に作品が載つてゐる。○みしめ縄 注連縄に神聖を表す接頭辞みを付けた語。神を祭る神聖な場所を俗界と区別するために張る縄。家良「何時までか常盤の森のみしめなはつれなき色に懸けて恋ふらむ」。○懸て祈しかひもなし この作は、知家「ゆふだすき懸けて祈りしかひもなし手向けの神や靡かざるらむ」を明らかに意識。しめ縄を懸けることと恋を心にかけること、神に願掛けすることを掛けている。○むすひの神や 結ぶの神とも。古事記冒頭に記される万物造化の神、神皇產靈神と高御產巢日神が、後世恋を結ぶ神となつた。元輔「千歳とは我ならねどもゆふだすきむすびの神も祈りかくらむ」。拾遺集「君見ればむすぶの神ぞうらめしきつれなき人をなつくりけむ」。○名のみ成らむ 小町「秋の夜も名のみなりけりあふといへば事ぞともなくあけぬるものを」。

25 逢恋あうこい  
森本後凋もりもとこうとう  
因幡鳥取人いなばととりひと  
逢あひ見みれはは  
うきに年とへし 玉たまのおの  
絶たまざさりしさえへ 嬉うれしかり鳶けり

【大意】（長い恋の後、逢瀬を果たして）こうやつてあなたにやつと会えた身になると、これまでつらい思いで長年過ご

してきて、死んだ方が楽だと思っていた私の命が、なくならないですんだということまで、うれしくてたまりません。

【注釈】○逢恋 恋が成就することだが、そのあともつらい不安が続く。源兼氏に同題あり。皇嘉門院別当「摂政右大臣の時の家の歌合に、旅宿逢恋といへるこころをよめる 難波江の芦のかりねの一よゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき」。○森本後凋 因幡鳥取人『改正官員録』明治十二年十二月には、島根の人（生まれは鳥取らしい）として高知県の六等属に記載。のち、京都府書記官、帝国京都博物館初代館長。漢詩作品が諸集に掲載されている。○逢見れは 順弱りもぞする」を意識。○嬉しかり鳩 閑院左大臣「ふるさとの佐保の河水けふも猶かくてあふせはうれしかりけり」。

26 山家水 松の舎司 沢氏 出雲松江人  
たつね来る 人こそなけれ 柴の戸に 音信たえぬ 谷川のみづ

【大意】（山中のあばら家のそばの小川）山中に隠居した我が家を訪ねてくる人はいないが、柴で作った粗末な戸のあたりには、谷川の水が音を立てて、あたかも便りをいつも寄せているかのようだ。

【注釈】○山家水 続後撰に「百首歌たてまつりし時、山家水 入道「一品親王道助」の詞書あり。歌語として、やまがと訓読みしたであろう。○松の舎司沢氏 『島根県職員録』明治十三年一月十五日改の島根郡秋鹿郡意宇郡の郡書記十三等相當に、「澤（沢）司」の名あり。○たつね来る 花園院「たづね来る人もおとせぬ柴の戸に明け暮れ聞くは峰の松風」を意識する。○人こそなけれ 増基「われをとふ人こそなけれ昔見し都の月は思ひ出づらむ」。○柴の戸に 雜木を編んだ粗末な戸。転じて、隠者の住む粗末な家。西行「山ふかみ霞こめたる柴の戸にともなふ物は谷の鳶」。○音信たえぬ おとづるは、本来音を立てること。それと、引伸した意である、訪問、音信の意を掛けている。経信「夕されば門田の稻葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞ吹く」。この歌、行家・山家水「せき入るる庭の山水あはれにも音づれ絶えぬ年のへにける」をふまえるか。○谷川のみづ 肥後「冬深み氷や厚く閉ぢつらむ音絶えにけり谷川の水」をも

じつたか。

27 餌別贈弓

桃李園年長

手束弓

やがて帰ると 云か嬉しさ

放つとは

つらき名なれと

手束弓

やがて帰ると 云か嬉しさ

【大意】（お別れの贈り物として弓をやる）おまえを遠くへはなちやるというのは、薄情なことばである。はなつといえば、今お前にやろうとしている弓だが、弓というものは「矢（や）」がて帰るものだと言われている。おまえもすぐに帰つてくるといつてくれる。うれしいことだ。

【注釈】○餌別贈弓 和漢朗詠集に餌別の項あり。たとえば、息子を遊学させるような状況か。贈弓が、餌別でよくあることなのか、不明だが、武士の家柄なので、壮行のために先祖伝来の弓矢を息子に贈つたか。あるいは、無事を祈る破魔矢の類か。○桃李園年長 増田年長。既出。○放つとは 手放す意と弓等を放つ意とを掛けた。○つらき 本来は薄情、冷酷の意味。後にそのような仕打ちを被つた人の苦しみの意味に広がつた。○名 人の名にかぎらず、事物一般の名称を指す。○手束弓 手に握り持つ弓。あるいは、弓の握る部分が特に太くなつてある強力な弓という説もある。万葉集「手束弓手に取り持ちて朝狩りに君は立たしぬ棚倉の野に」。○やがて 本来は、すぐに之意。のちに、そのうちに、の意にひろがつた。矢（弓の縁語）と掛けているのなら、すぐに、の方であろう。○帰ると 獲物を射た矢が手もとに返ることと餌別の相手がここに帰ることを掛けているのである。矢は放たれたは、普通取り返しがつかないことをいうが。○云ふが 世上に言われていることと相手が言つてていることの両方を兼ねているのである。○嬉しさ 人麿「大己貴少御神の造れりし妹背の山を見るが嬉しさ」。

28 龜 千家尊賀  
代とたへし濱は住龜のとし波よする名にこそ有けれ

【大意】（龜）千年も万年も続くとたえられたこの浜辺は、ここに住む龜の寄る年波にちなんで、このような名声があ

るのであろう。

【注釈】○千家尊賀 皇学者・歌人。通称亀麿、号は梅之舎四世。尊澄の次男。出雲生。明治三十九年没。七十九代出雲国造千家尊澄の子。八十代千家尊福の弟。詩人千家元麿の戸籍上の父。○万代と 貫之集「波間より出で来る亀は万代と我が思ふ事のしるべなりけり」。大輔「かけていへばゆきものを万代と契りし事やかなはざるべき」。元輔「万代を数へむ物は紀伊の国の千尋の浜の真砂なりけり」。恵慶「万代の波の間なくも寄するかな鶴と亀との遊ぶ浜辺に」。○たゞへし濱は どことを指すか不明。出雲大社の裏の稻佐の浜か。大国主神の国譲り伝説の聖地。○とし波よする 年がつみ重なつていくことを、波が幾重にも寄せるのにたとえる。式子内親王「としなみの重なることをおどろけばよなよな袖にそふ水かな」。夫木抄「旧りにける磯の窟屋に住む亀は幾年波を重ね来ぬらむ」。名に「寄する」を掛けたか。○名にこそ有けれ 貫之「かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ」。あるいは、亀浜、万代浜等の名がつけられた浜のことなのかかもしれないが、適当な地名が出雲大社付近には見あたらない。

二号正誤

壹葉表五行追ハ趁ノ誤。 四葉裏初行経ハ径ノ誤。 五葉表五行春ハ夏ノ誤。

※第一号 漢詩部分2、21、25。それぞれ、該当部分の訳注を参照。

【雨森精翁跋】

作レ詩難。評レ詩更難。非善作者一雖レ評不レ當也。松江詩人評「余詩一為二小兒学レ語者」。余詩誠不レ成レ語也。其評為二小兒者當矣。猶何暇評「人之詩」乎。静遠睡仙二史。自「松江」通「此冊」來懇レ評。可レ謂下責「難於レ人者上矣。幼舌睨瞞。使三之判二曲直」。人孰信レ之。雖レ然。非我之求レ於二史。二史之求レ於我也。人虛已以來。我尽吾事一已。至二當与レ不レ當。自有二輿論在一。乃妄批所レ見。以問之大方。其亦必有二不レ成レ語者。老雨居士

【訓説】詩を作るは難し。詩を評するは更に難し。善く作者に非ずんば、評すと雖も当たらざ（不）る也。松江の詩

人余が詩を評して小兒の語を学ぶ者と為す。余の詩は誠に語を成さざ（不）る也。其の評して小兒と為す者も當たり矣。猶お何ぞ人の詩を評するに暇あらん乎。静遠、睡仙二史、松江自り此の冊を通え来りて評を懇む。難を人に責むる者と謂う可し矣。幼舌睨嘔、之をして曲直を判ぜ使む。人孰か之を信ぜん。然りと雖も、我の（之）二史に（於）求むるに非ず、二史の（之）我に（於）求むる也。人已を虚しうして以て来る。我吾が事を尽くす已。當たると當たらざると（与）に至りては、自ら輿論在る有り。乃ち見る所を妄批して、以て之を大方に問う。其れ亦た必ず語を成さざ（不）るもの有らん。老雨居士

【大意】詩を作るのが難しいのはもちろんだが、詩を批評するのはもつと難しい。詩作に優れた人でないと、批評しても、当を得ないのである。松江の漢詩人たちは、私の詩を評して、子供が言葉を学んだばかりのようだと言つてゐる。私の詩は確かにちやんとした言葉になつていない。子供みたいだと評されるのも当然だ。そんな私なのに、人の詩を評する余裕などどうしてあろうか。平賀靜遠君、勝田睡仙君の二人が、松江からこの風月小誌を送つて、私に評を求めてきた。人に厄介な仕事をおしつけた、というべきであろう。私は幼児の舌がわーわー叫ぶようなものなのに、是非曲直を判断せよという。誰がそんな私の批評を信じるものか。とはいへ、私からお二人に書かせると頼んだのではなく、お二人の方が私に書けと依頼してきているわけで、あちらが虚心に來てゐる以上は、自分は自分にできるかぎりのことをするだけだ。我が批評が当を得てゐるかどうかは、多くの人がおのずから判断することであろう。というわけで、自分の思つたまま批点を加え、博雅の人士の見解を聞くことにした。お話にもならない部分はもちろんあるだろうが。老雨居士。

【注釈】○当 妥当、適當の意で、中国近世では、去声で読むよくなつたが、真理や基準に「あたる」ことから生じた意味なので、読書人は普通に平声の動詞として讀んでいたのである。○史 本来は歴史官のことだが、学者一般を尊敬して言う。○遞 遷の俗字。人づてに送ること。ここは恐らく郵送。○懇 心から真摯に求めること。張自烈・正字通「懇は、俗に借りて干求の意と為す」。懇求、懇請。○責難 責任を追求して非難すること（責めて難ず）。できないことを要求すること（難を責む）。励ましの気分がある。孟子・離婁「君に責難するは之を恭と謂う」。○睨嘔 赤ん

坊の泣き声。おんぎやあ。荀子・富国「之を拊循し、之を睨嘔す」。楊倞注「嬰兒の語声也」。ここでは評が意味をなさないことをいう。○曲直 是非善惡。間違つたことと正しいこと。書經・洪範「木は曲直と曰う」。史記・李斯伝「曲直を論ぜず」。○虚己 私的な利益を求めるのではなく。韓詩外伝「君子德を盛んにして而して卑しく、己を虚しくして以て人を受く」。○尽吾事 「人事を尽くして天命を俟つ」の俗諺を意識する（胡寅・讀史管見などに同趣旨の語あり）。○輿論 多くの人の意見。輿（くるま）が多くの人を載せることから。左伝・僖公二十八年「輿人之誦を聽く」。○所見 本来は見た対象のことをいうが、考え、意見の意に古くより用いられる。莊子・列禦寇「愚は其の見る所を持み、人（為）に入る」。○大方 本来は賢者、学識のある人を指すが、日本ではおおかたと読んで、世間一般の人をやや敬意を加えて言う場合が多い。莊子・秋水「吾長えに大方之家に笑わる」。

【奥付】  
明治十三年八月御届  
同年同月出版【定価四銭】の押印あり

編輯兼出版人

島根県士族

平賀半助

出雲国松江内中原町

同県士族

勝田千之助

同国松江南田町

同

同

村上正雄

発兎  
はつだいん

同国松江奥谷町  
どうこくまつえおくだにちようちょう  
同県平民  
どうけんへいみん  
いちねんしや

一年舎  
どうこくまつえんじんちやう

同国松江天神町  
どうこくまつえんじんちようちょう

【付記】本稿は、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト

山陰の文学・歴史関係資料の基礎研究と公開方法の開発に関するプロジェクト  
(番号二五〇一 期間二〇二五～二〇二七年度 研究代表者田中則雄)  
による成果の一部である。